

第 84 回公開シンポジウム

批判的思考力を身につける・育む

◆ プレゼンター

楠見 孝

京都大学大学院教育学研究科教授／認知心理学・教育心理学

◆ パネリスト

服部 弘

NHK エデュケーショナル 部長プロデューサー／社会調査

◆ 司 会

一色 伸夫

甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第 84 回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日は「批判的思考力を身につける・育む」というテーマでお二人の先生をお迎えして進めて参ります。保育士や教員にとって、子どもを多面的視点でとらえ、一方で、自らの実践を振り返ることは、子どもと自らの成長にとって重要なことです。批判的思考とは、相手の話に耳を傾け、自分の考えが正しいかどうかの吟味をし、よりよい判断をすることです。この講演では、教員と子どもにとって必要な考える力とは何か、それを育む教育のあり方を考えます。

今日は、この批判的思考力に関する日本の第一人者であられる楠見孝先生のお話を伺います。楠見先生は京都大学大学院教育学研究科教授でいらっしゃいます。先生のご専門は認知心理学、教育心理学です。簡単なお略歴を申し上げます。学習院大学で博士課程単位を取得され、学習院大学助手、筑波大学講師、東京工業大学助教授を経て、京都大学で教授になられ、現在に至っておられます。主な著書としては『批判的思考力を育む』というご著書があります。非常にわかりやすくとても面白い本でした。それから、楠見先生の基調講演に続いて、パネリストとして服部弘先生です。服部先生は、東京大学をご卒業されてから NHK 放送番組のディレクターとして「NHK 特集」「NHK スペシャル」「クローズアップ現代」などの番組を制作され、その後 NHK 放送文化研究所で社会調査とか番組内容分析の研究をされていて、今年の春から NHK エデュケーショナルで放送大学番組制作支援、小中高大学向けのデジタル教材の開発などをされている方です。では、早速、楠見先生に基調講演をお願いいたします。

はじめに

楠見：一色先生、ご紹介ありがとうございます。京都大学の楠見です。今日は皆さんの前で講演ができますこと、たいへん嬉しく思っております。今日のテーマは「批判的思考力を身につける・育む」というテーマです。皆さん、「批判的思考力」あるいは、「クリティカルシンキング」という言葉を聞いたことがある人はどれ位いますか。ありがとうございます。聞いたことがある人も聞いたことがない人もこれか

ら批判的思考とは何かということを45分ぐらいでお話したいと思っています。

最初に、批判的思考力というのが、なぜ教育の現場で大事であるのかをお話したいと思います。文部科学省は、国家戦略会議という国家の戦略を決める会議の中で社会の期待に応える教育改革の推進ということで、今年の6月に7つの改革案を出しました。その中の1番目は、皆さんも関わる大学教育をどう変えていくかということで、主体的に学び・考え・行動する人材を育成するように大学教育を変えなければならない。従来の知識重視型から主体的に学び・考え・行動する人材をもっと出すということです。これは産業界からの要請もあったのだと思います。それから2番目は、初等中等教育の改革、これは小・中・高校のことですが、こちらの方もすべての子どもに課題解決のために、自ら考え・判断・行動できる「社会を生き抜く力」を育成することが大事であると提言しています。これは、知識重視型の教育からの大きな転換です。そしてクリティカルシンキングという言葉が、その中で出ていました。ここでは、「考える力(クリティカルシンキング)」とありますから、考える力を代表するものとしてクリティカルシンキングを挙げています。考える力とかコミュニケーション能力をもっと育成すること、体験的な学びが大事であるということを強調しています。そういう意味では、従来の知識とスキルをたくさん獲得する。そしてテストの時にそれを発揮するというのではなくて、自ら考え、行動する子どもたちさらに学生を育てることが重視されるようになってきました。そして、保育士の養成課程の改訂を見てみると、特に演習の中で保育実習を振り返る自己評価や、保育に対する課題や認識を明確にする。つまり保育者としての専門性を高めるために、そうした自らの保育を振り返る力とか課題解決力を育成することを重視されるようになったわけです。ここでは、実践できる力、即戦力を養成するというよりも、長い経験の中で自らいろいろなことを学び、その経験を生かして力をつけていくような人材を育成することがもっと大事であることが考えられるようになってきました。

批判的思考とは何か

そこで、今、話をしてきた批判的思考とは何か。大きく2つに分けることができますと思います。

一つめは論理的に考えることです。企業の人に聞いても、ロジカルに考える力を持った人たちを欲しいとはよく聞く話です。それはどういうことか。まず信頼ができる証拠を求めていくということ、それから、自分だけの視点ではなくて、多面的に捉える、そして、論理的にあるいは科学的に、あるいは客観的に正しい情報を選んで人に伝え、それに基づいて考える。ここでは、“criterion”、クリティカルシンキングのクリティカルのは“criterion”で、規準に基づいて考えるということです。たとえば保育の現場での規準は何か。保育環境評価スケール、これはアメリカで作られたものですが、その日本語版がこちらですが、これを見てみると、皆さんも保育実習などで、保育園、幼稚園、小学校などに行き、観察することがあると思いますが、そういう時に漠然と観察するのではなくて、たとえば、最初に子どもたちが登園してくる時に、子どもが暖かく迎えられるかどうか。もう一歩進んで一人ひとりの名前が呼ばれて迎えられるか。さらに何か手助けするような子どもがいれば、すぐに活動に入れるように手助けをしているかどうか。たとえばそのような3つのレベルで見ると、自分が実習の時に一人の子どもを見ることができているかどうかとか、知らない内に部屋で遊び始めている子どもがいるか

どうか、実際に保育をしている先生であれば、お母さんと挨拶をしたことがないなどで他の人を観察し、評価するだけではなくて、自分自身を振り返る時にそうした“criterion”（評価の規準）を使うことができるわけです。つまり、これは、もう一つ大事な批判的思考の要素であるリフレクション、振り返るといことが大事であるということです。振り返るとはどういうことか。よく、マイサイド・バイヤス (my side bias) と言われていますが、どうしても私たちは自分が正しいと思いがやすいのです。そうならないようにするために、自分自身を振り返ってみる。それは偏りのない思考とか柔軟な思考に結びついています。

批判的思考というと、どうしても相手を非難する。たとえば揚げ足を取るなど、あまりよくないイメージがあるのですが、むしろ、自分自身の思考を吟味する。私たち認知心理学者はメタ認知と言っていますが、「メタ」というのは、一つ上のレベルから自分の考えを眺めることですが、そういうような省察的な思考が大事であると言われています。ですから、単なる反省ではない。「反省」というと、日常語ではわかりやすいのですが、単にあの時は駄目だったとかこうすればよかったとは誰でも思うと思いますが、その時に批判的に“criterion”に基づいて評価をして、客観的に捉えて、さらに次にどのようにしたらいいのかを建設的に考えていくということが、批判的思考の2つめの大事な要素です。

それでは、どういう場面で批判的思考を使えばいいのか。保育や教育の実践だけではなくて、メディアの情報に接したり、人の話を聞いたりあるいは何か自分の発言をしたりする時に、何を信じ、何を主張し、どうこうするかを決定する時に働いているものです。こうしたものは、特別なものではなくて、皆さんが日々勉強をしていること、あるいは社会に出てから保育教育の現場において、いろいろなところに使えるスキルとなります。つまり、人の話に耳を傾けて、わからないことがあれば質問をして情報を集めて行動決定する。これは、ジェネリック（汎用的）なスキルにあたります。それは、「コアにあるスキル」とか「キイ・コンピテンス」とか“employable skills”、「社会人基礎力」などの形で、正に産業界でも求めている重要な社会人としての基礎力とも共通していて、その中に批判的思考、コミュニケーション能力、問題解決能力、チームワーク能力があると考えています。そして、こういうジェネリックなスキルが、皆さんが学部教育で身につけるべきスキルとして位置づけられているのが最近の大きな流れです。従来は、知識とは即戦力重視だったのが、もっと大事なそれを支えているようなコアになるスキルをつけていくということが、大学において、さらに高校以下の小中高校の教育において大事であるということが言われるようになってきています。

省察については先ほど、少し言いましたが、ジョン・デューイというプラグマティズムの思考の哲学者が、「いろいろな経験の中での問題解決の時に、さまざまな探究を行うための思考」である。さらに、ショーンというデューイを引き継いだ哲学者は、「いろいろな状況の中で、振り返りながら、柔軟に対応していくのが、教育者であって、その中で経験から新たなことを学んで学習していくのが、省察的な実践家としての教育者」だと言っています。

省察が、どういう時に起こるかということ、過去を振り返って洞察を得る部分と、将来を見通しながら、いろいろな可能性を考えて洞察していくという2つの部分があります。振り返りと見通しの2つが省察の中に含まれています。実際に、皆さんが関わっている保育や教育の現場の中の学びを考えてみると、大

学の授業で専門的な知識やスキルを学ぶことも大事ですが保育実習とか教育実習の経験の中から教訓とか自分なりの持論のような理論を引き出してることがあると思います。それは、大学や本で学んだ知識と自分が経験から導いたことをうまく結びつけることによって、どういうスキルをある時に発揮したらいいのか。たとえば、どういう時に声掛けをしたらいいのかとかどういうところで助けてあげればいいのかという持論を生み出すことになると思います。その中では、振り返ってみるといურიフレクションが非常に大事になっています。そして、教科書で書かれているようなシンプルな状況とか事例ではない、現実の非常に複雑でしかも不確実な状況をうまく見極めてそれを明確化する必要があります。子ども同士が争いを起こしている時にその原因を突き止めるためには、状況を明確にしなければなりませんし、判断する時には、そのためのデータが必要になってくると思います。たとえば、その子どもがどのような子どもなのかということを知らなければうまく対応できません。そして、その時々の子どものと環境に注意を向けて、その子どもの育ちにとって最も大事な形での選択、それはサポートであれ、声掛けであれ、いろいろな形があると思いますが、それを日々していかなければならないのが保育者、教育者です。

ここでは、どういうスキルが必要なのかということで、カツツ (Katz) という経営学者が、大きく3つ、実践的な知識として必要なものを挙げています。

1番目はテクニカルスキル、仕事の手順とか内容です。これは、スムーズに保育とか教育をやるために必要な手順で学校の講義や実習で習います。

2番目はあまり学校では教えてもらえないヒューマンスキル、つまり人の話を聞くとか伝える、見る、人間関係を作る。これは、子どもあるいは親、同僚、上司とうまく話をしたり説得したりして協同関係を築く時に大事な対人関係能力になります。

3番目がコンセプチュアルスキル、概念スキルという言い方をしますが、複雑な状況とか変化を分析して、問題解決をするというものです。あるいは、自分なりのビジョン、目標を立てる。あるいは幼稚園、保育園で自分が受け持っているクラスをどう変えていくかということを考える時には、コンセプチュアルなスキルが必要になってきます。それは、状況を分析し、情報を集め、そして解決策を考えるような批判的思考力やアイデアを見出すような能力です。それは単なる仕事の手順とかヒューマンスキルだけではない、もう一歩上のスキルになります。

図1に示しましたが、一番土台には批判的思考、省察、経験から学習する態度、その上にテクニカルスキル、ヒューマンスキル、そして、それをうまくコントロールするメタ認知スキル、そしてその上にコンセプチュアルスキルがあります。テクニカルスキルと

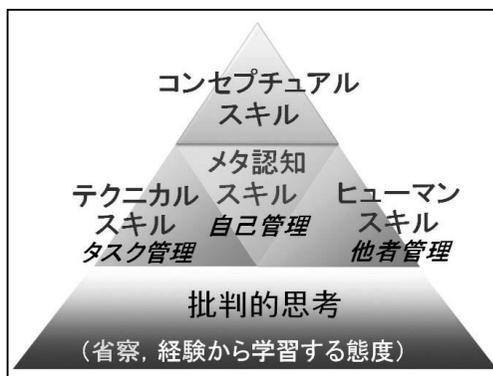


図1 保育者 / 教育者のスキルを支える批判的思考

ヒューマンスキルは比較的早く獲得されて、そして、その後コンセプチュアルスキルが獲得されます。

なぜ批判的思考が大切なのか

次は、今までお話してきました批判的思考がなぜ大事なのかということです。

1番目は、皆さんが大学で学ぶ学習者として、そして将来の保育者、教員、市民として、複雑な状況を判断してその問題を解決するために必要であるということです。

2番目は、さきにマイサイド・バイヤスと言いましたが、どうしても私たちは自分の考えは正しいと思って、そして自分と同じような考えを他の人が持っていることがいいことだと思いがちですが、そうしたことに目を向けて、そして、異なる立場の人、異なる意見があることを知り、そうした中で考えていくことはより良く生きていくためには重要です。

これは、3番目の話につながりますが、異なる意見の人に耳を傾けて、そしてその人たちと協同して問題を解決していくことが大事です。適切なコミュニケーションや創造的な問題解決のために、なかなか意見の違う人を納得させるのは非常に難しいですが、相手の意見にも耳を傾け、そして自分の考えも伝える、そして、相手も自分も満足できるような解決策を導くということが理想です。

4番目は、証拠に基づいて考えを明確に、自信を持って発言できるということです。単に自分はこうしたいとかこうなのだといっても、なかなか相手は耳を傾けてくれないケースがあります。その時にきちんとした証拠に基づいて話すことによって同僚や子どもに説明をする時、あるいは、子どもの親に説明をする時にでも、自分の考えていることを相手に伝えることができる。また、それによって相手を動かすことができることになると思います。

それから5番目は、今までとは違うのですが、よく私たちは、人から批判されたり、うまくいかなかったりすると、自分は駄目な人間だと思ってしまいますが、必要以上に否定的にならずに済むということです。たとえば、相手から批判されたとしても、それは、自分の考え方の間違いを指摘されたのであって、自分という人間が否定されたわけではないと考えれば、必要以上に落ち込む必要はないわけです。ですから、あまり否定的な考え方にとらわれずに、否定されたのは自分の考えであって、自分という人間ではないと考えることによって、不愉快な気持ちと自分自身で距離を置くことができるようになるわけです。

そして6番目は、日常生活や仕事の中でいろいろと根拠のない情報や噂、インターネットの情報から適切な情報を見抜いて、判断をすることができることです。

ただし、日本では、「批判的思考」における、「批判」という言葉はあまりいい言葉ではありません。先ほども言いましたが、論、議論や意見ではなくて、人を批判していると捉えられてしまう。「非難」に近い、感情的な意味合いを持ってしまいます。ですから、私は西洋的クリティカルシンキングに対して、日本的な批判的思考があるのではないかと考えています。日本では、自分自身に対する省察、振り返りとそれから自分を改善していく自己研鑽のような部分が重視されています。また、常に相手を批判するのではなくて、批判しなくてもいいことは世の中にたくさんあります。つまり、楽しく過ごせばいい時がありますので、そういう意味では批判をすべき時に批判することが大事です。そしてもう一つは、ロジカルな発言をしたとしても、相手を動かすこと、集団を動かすことはできないことが多いと思います。たとえば、サークルで何かを提案する時にロジカルな意見を言っただけでは、多分、皆の気持ちを動かすことはで

きないと思います。そこで大事なものは、集団の調和とか相手の気持ちなどを配慮した形で批判をする。うまく相手の気持ちに配慮をした協力的な批判的思考が、日本社会では、大事ではないかと考えています。

批判的思考の構成要素

ここまで批判的思考がなぜ大事であるのかというお話をしましたが、では、どうやって批判的思考をすればいいのかというお話をしていきます。

図2は、批判的思考をおこなう頭のなかのステップを示しています。一番左側から、相手の発言とかメディアとか書籍、あるいは、皆さんが教育実習、保育実習の現場で見たり観察したことが頭に入ります。

第1のステップは、明確化をすることです。明確化とは、まず観察をしたり、耳を傾けたりして、状況を捉えることです。そして、問題は何であるのか、あるいは、人の意見であれば、仮説は何なのか、書かれていることであったら、前提は何なのか、定義は何なのかに焦点を当て、結論はどこにあるのか、理由は何か、事実はどこか、意見はどの部分かを分析することです。さらなる明確化をするためには、たとえば、「あなたが言っていることはこういうことですか」とか、「なぜですか」、「どこが重要ですか」、「例を挙げて下さい」などの質問をしてもいいし、あるいは、それを頭の中で問いながら読んでいく、聞いていくこともあると思います。

第2のステップは、推論の土台を検討することです。たとえば、ある主張があったとすると、その根拠を明らかにする必要があります。いろいろな新聞記事を読んだり、他の人の主張を聞いたりする時にそれが果たして、専門家による主張なのかとか、あるいはいろいろな情報源があった時に一致しているのかとか、確立した手続きをとったデータなのかを見ていかないとならないことが多いと思います。たとえば、低線量の放射線が私たちの健康に影響があるかどうかは、いろいろな専門家で議論があって、その情報は一致していません。そういう中で、どの情報を自分たちは信頼するのかを考えた場合に、このようなステップは大事になってきます。科学的な事実や観察結果などを評価する時には、科学リテラシー、マスメディアの情報を評価するときには、メディアリテラシーといったような情報を読み解く能力において、批判的思考というのは、非常に重要な役割を果たしています。

推論の土台として科学的な事実を評価しなければならない例として、「ゲーム脳」を取り上げてみます。「ゲームを長時間していると、前頭葉、前頭前野が働かなくなって、キレやすい、集中できない、付き合いが苦手ということが起こったりする」という主張です。実際に新聞記事とか週刊誌には、「ゲーム脳ご注意、毎日2時間以上で前頭前野が働かず」「テレビが子どもの脳を壊す」といった主張がでていたわけですが、現実に根拠となる科学的データがあるのかというと、必ずしも十分なデータに基づ

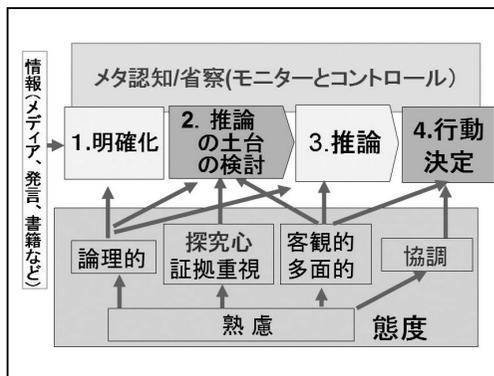


図2 批判的思考の構成要素

いて研究がされておらず、専門学術雑誌といわれているような専門の人たちの厳しいチェックの中で掲載された論文はありませんでした。新聞や雑誌の記事には、チェックのない学会発表だったり、単行本に基づいていたりということが、しばしばあります。しかし、受け取る私たちにとっては、新聞や雑誌に出たものは事実のような形で受け取ってしまうことがあります。ある意味では、それは一つの仮説であって、なかなか断定がすぐにはできない。あるいは、科学者によってもいろいろな見方がある。それは先ほど話をした、放射線の問題であれ、温暖化の問題であれ、いろいろな議論があるのが実情です。また、ある一つのデータに関しても、専門家によって解釈とか意見が違っていることがありますので、データの部分と解釈や意見の部分は分けることが必要になってきます。

それからもう一つ、推論の土台として検討すべきことに暗黙の前提があります。相手の考えと自分の考えが食い違う時、基本となる前提が違っていることがあると思います。たとえば、子どもの教育に対する考え方の時にそのようなことがあります。その時には、相手が何を前提としているのか、どういうことを背景にしているのかで相手の背後にある前提が何なのかを考えなければなりません。あるいは自分が最もだと思って相手に言ったことが相手に伝わらなかった場合は、自分も何等かのことを前提にしていることがあると思います。つまり言わなくても相手が持っているべきだと考えていることが、必ずしも人とは共有されていないことがあります。たとえば次の文です。

「患者は心理療法を受けている。だから、回復までに時間がかかる」

これは、ずっと読んでしまうかもしれませんが、ここでは、「だから」の前に暗黙の前提があります。「心理療法は回復までに時間がかかる」ことを前提にしているから、この「だから」ということがでてるのです。つぎの文はどうでしょうか。

「患者が化学療法でなく手術を希望している。だから、手術を行うべきである」

この「だから」の前には、「治療法は患者の意見を尊重すべきである」があります。これは事実前提というよりはある種の価値観、価値の前提が入っているわけです。ですから、こうしたずっと読んでしまうようなときは、前提を共有している場合であり、この議論にそのままついていくことができるのですが、そうでない場合は、ついていくことができません。ですから、そういう場合には、前提を洗い直してみるとということが、必要になります。

第3のステップは、推論です。第2のステップで土台を検討した情報から結論を導くことです。ここで注意するポイントは3つあります。1つめは適切な帰納推論をすることです。私たちは議論の中では、たった一つ事例を挙げただけで、それを一般化してしまうこともありますし、テレビの情報番組などの場合は、10人、15人ぐらいに実験をしてそのデータに基づいて結果はこうだということもよくあります。ただ、その場合には、その結果が一般化できるのかという問題があります。2つめは、誤りのない演繹推論をすることです。たとえば、時々議論の中では、「AでなければBだ」という形での誤った二者択一論法での議論がされる場合があります。3つめは価値判断です。価値判断する場合には、先ほどの手術をするべきかどうかという時には、事実に基づく判断という部分と最終的に手術をするべきかどうかという時には、価値判断、つまり積極的に手術のような治療を受けるか、手術を回避したいか、そういうことがあります。このように推論をする場合には、いろいろな情報を集めて比較して自分自身で

結論を導かなければならないという部分があります。

第4のステップは、批判的思考の最後に頭の中で考えているだけではなくて、行動を決めることです。たとえば、皆さんが、自分の将来の進路をどうするかをクリティカルに考えようとしたら、「大学卒業後の就職先を決める」というように(1)直面する問題を定義します、そして、(2)その問題を解決するための規準の選択、たとえば、「自分が人生において何をしたいのか」という問いに基づいて「自分のやりたいことが実現できるか」とか、「現在住んでいる親元から通うことができるかとか、勤務地、年収など、いくつかの規準を選択します。そしてその次に(3)いくつかの選択肢(就職先)を複数考えて、(4)その中からどれを選ぶべきかという仮の決定をして、(5)その決定を再吟味しながら、(6)実際に活動をして、それがうまくいっているかをモニターする。これを何度も繰り返していくことが必要になってくるわけです。そして、自分の頭の中だけではなくて、他の人と話をしてみる、議論をしてみることを通して、実際に行動を決め問題を解決していくということが必要になってきます。

全体をまとめますと、図2に示すように、明確化、推論の土台の検討、推論、そして行動決定、そしてこれらの上には、メタ認知といわれている省察する、振り返るそしてうまくいっているかどうかをモニターしてコントロールするという部分があります。これだけでうまくいくかというそうではなくて、その下に、論理的に考えたり、探究したり、客観的に見たり、人と協調したり、さらにじっくり考えるという態度がなければ、いくらこのようなスキルを持っていても、使うことはなかなかできません。ここに書きましたが、明確な主張や理由を求めていくような論理的な思考態度、様々な情報や知識とか選択肢を探していく探究心、それから、主観にとらわれずに多面的、公平的に物事を考える客観性、証拠を重視する、信頼できる情報源を求めて証拠に依拠した立場をとる、そして、新たな証拠が出た時は、自分の考えを改めるような証拠を重視する態度、そして最後が、情報を鵜呑みしないでじっくり考える熟慮の態度です。また、相手の感情や価値観を配慮して協調して問題を解決しようとする態度も重要です。

私たちのグループでは、批判的思考の態度尺度というものを作りました。たとえば、「複雑な問題について、順序よく考える」ことについて、自分のふだんの行動に「当てはまる」から「当てはまらない」の5段階で聞くような尺度を作って、セルフチェックをできるようにしています。特に皆さんにとって大事なものは、探究心だと考えています。つまり、今、自分ができるような課題に満足しないで、少し自分が背伸びをした挑戦的な課題にチャレンジをすることが、学ぶことや達成することの喜びにつながります。また、その時には失敗に終わるかもしれないけれども、どこがうまくいかなかったかを知ることによって、次の成長に繋がります。その時にいろいろな人からアドバイスをもらい、経験を振り返ることによって、教訓を得ることが大事なことだと思います。

ここで、探究心と保育の視点の関係を示す、愛知教育大学の藤木大介准教授のデータを紹介します。これは、保育の事例をA大学の子ども学部の子に4つの事例を各10分間、読んでもらって、保育をするという観点から気付いた事柄を思いついた順にできるだけたくさんあげてください、という実験をしています。ここでは分かりやすい事例を挙げます。皆さんもここから何か気付いたことを頭の中に

思い浮かべてください。

赤ちゃんになっている A 美と G 哉がさかんに「お腹がいたいハブ」と言っている。保育者が C 代に声をかけて「病人がいますからきてください」という。C 代は積み木の車から降りて、赤ちゃんになっている A 美の前に立つ。そして、「どこが痛いの?」とまじめな声で聞く。A 美は何て答えたらよいのか分からず、しばらく何も言わない。そのうち小さい声で「本当はうそっこ痛いの」とささやく。他の子どもたちが A 美と G 哉の世話をする。C 代はその様子をじっと見ている、積み木の車に戻り「誰かお腹の痛い人いない?」とつぶやく。

これを見て皆さんは何か気付いたことはありますか。A 美と G 哉は、赤ちゃんになって、病気のふりをしている。C 代というのは、3歳児で5月に保育園に入ったばかりの子どもです。保育者が一緒にごっこ遊びをしているので、C 代を誘ったわけです。そして、C 代は赤ちゃんになっていた A 美と G 哉に真面目な声で聞くとありますから、ごっこ遊びをしているということが分からないで、真面目な声で「どこが痛いの」と聞いてしまう。そして、A 美は何て答えたらいいのか、つまり、ごっこ遊びの世界の中にいるのに、本当に痛いと思われて聞かれたので答えられない。そして、ごっこ遊びだということがわかるように本当は「うそっこで痛いの」とささやく。そして、子どもたちが A 美と G 哉の世話を横からいろいろとする。C 代は、うまくは入れなくて、じっと見つめていて、そして積み木の車にのって「誰かお腹がいたい人はいない」とつぶやく。皆さんは気付いたことはありますか。いろいろな気づきがこの中から出てくるかと思えます。たとえば C 代の気持ちになってみると、最後に戻ってからつぶやくというのは、C 代は何を考えたのでしょうか。あるいは、この場合、A 美の行動は、どういうことを表していますでしょうか。この研究では、10 分間で平均 3.14 個学生たちは気づきがありました。そして、批判的思考態度質問紙のこの探究心の得点が高い人ほど、気付いた点をたくさんリストアップしたという結果を導いています。つまり保育の場面などで観察して気付いたことを見抜くというのは、探究心というのが関わってくることをこの結果は示しています。

批判的思考の大学における育成

次のテーマに移ります。どのようにしたら批判的思考力が身につくようにしていくのかということです。一つは導入教育です。大学に入ってきた1年生に対して、リーディングやライティングのスキルを指導して、優れた学習者として、批判的思考ができるように教えることです。また、市民として、社会人として、メディアを読み解くメディアリテラシー、あるいは経済を読み解く経済リテラシー、健康リテラシーなど批判的思考力に基づいて情報を読み解く力とかコミュニケーション能力を育成していくことです。

そして、専門教育としては、優れた専門家を育てる。保育士や教員を育てる時には、保育実践、教育実践において自分の経験から学んで、そこから実践ができるようにしていくことが非常に大事になっていきます。そこは観察をする、計画を立てる、判断をするなどのことが入っていますし、専門文献を批判的に読めるようになることが大事だと思います。

それでは、批判的思考を教えることが大学でできるのかという問いに対しては、心理学者は、批判的思考を構成するスキルを教えることによって、批判的思考ができるようになるという考え方をとっています。つまり批判的思考力が優れた人は、先ほど話をした明確化のスキルとか推論のスキルとか意思決定のスキルなどをたくさん持っていると考えます。ただ、スキルだけをトレーニングしても使えるようにはならない。つまり実際に問題解決、自分自身が問題を抱えていて、それを解決する中で解けるようになってくるのが大事であると考えています。ですから授業、実習、プロジェクトの学習、卒論などを通して、こうしたスキルを身につけていくのですが、それだけのものではなくて、他のところで使えるようになるということが大事であると思います。卒論などは、大学を卒業するためのものではなくて、1年間を通してプロジェクトの計画をたてて、データを集めて、いろいろな形で考察をして、まとめあげる。そういう中でさまざまなスキルが身につく、そしてそれが正に社会に出てから生きてくるのではないかと考えています。

どのようにして教えることができるのかということでは、3つの考え方があります。第1は、すべての科目に共通する批判的思考スキルを教えることです。これは、批判的思考のトレーニングです。これを導入科目で教えている大学もあります。第2は、各科目の授業、保育学とか教育学、心理学の中で批判的思考のスキルを明示して教える。第3は、特に教えないで、実際に実習の中とか講読演習の中で、批判的な力が自然に身につくという考え方です。これは伝統的な考え方です。ただし、この考え方ですと、身につく人と身につかない人があるので、実際にはこれらの混合アプローチが大事であると言われていきます。すなわち、まず、基本的なスキルを教える。そして、そのスキルを実際、保育や教育の実習の中で、練習をして、実践のためにいろいろなところで使えるようにしていくという考え方です。

では、どのような活動の中で、そうしたスキルが高められるか、以下の5つがあります。

1番目は、批判的な読解です。読むということが一つの出発点ですので、多分、皆さんは、小中高校の頃は、書かれているものは絶対であって、著者のいうことは絶対に正しいと思っていますが、必ずしもそうではないということがたくさんあります。たとえば、教育とか子育ての問題には、いろいろな証拠や対立意見があるわけですから、そこに着目することが大事です。

2番目は後で服部先生からもお話があるかと思いますが、テレビ、映画、ビデオなどメディアを読み解く力という中で身につけることです。たとえば、CMとかステレオタイプ、男性女性の描かれ方などは、あるバイアスがあると言われていきます。そういうのに焦点を当てて、実際に討論していくことが大事です。こうしたメディアを使った学習は、どうしても受身になってしまうからです。

3番目は、討論です。日本では、小学校は班学習のような討論を中心とした学習をしますが、中学高校に行くにしたがって、それほどやらなくなります。そして大学ではゼミではやるかもしれないけれども、多くの授業では活発ではないということもあると思います。討論の授業では、他の人の意見に耳を傾けて、その中でグループとしての様々な意見を取り込みながら結論を導くというスキルを育てることは非常に大事であると思います。

4番目は、レポートや記録を書くということです。これは、自分自身を振り返る。その中で明確化をして、そしてロジカルに議論を組み立てていくという中で、レポートを書くことは、批判的思考力を高め

る非常に大きな役割を持っています。

5番目は、グループでプロジェクトをすることです。これもプロジェクトを進めるためにいろいろな討論をしながら進めていく中で、コミュニケーションのスキルとか問題解決の力をつけていくことができると思いますし、あるいはゲーム方式のような形で、実際に意思決定の力とか対人関係能力を身につけていくというやり方もMBA（経営大学院）などではかなり行っています。

こうした活動の中で学生たちの批判的思考の力をつけていくということですが、それでは一方、皆さんが将来直面する、子どもたちの批判的思考力を育てていくにはどうしたらいいのかという、逆の方からのお話をしていきます。

子どもの批判的思考力の育成

1つは、論理的な思考力を高めるということです。まずは、いろいろな身近なものへの興味や関心を育てて、なぜだろうとか不思議だということを培ったり、あるいは、それを言葉にして、喜んで話すとか、それを聞くという態度を養う。つまり、人の話を注意して聞いたり、疑問に思ったことを尋ねることが批判的思考の出発点です。これらを、子どもの頃から育成することです。2つめは、省察的思考力を高めることです。自分の思っていることが相手によくわかるように伝えること、あるいは、相手が何を思っているのかに気付くことは大事です。また、振り返りということ、良いことと悪いことがあることに気付く、それを考えながら行動するということがその出発点になると思います。さらに、小学生になると論理的思考力が発達して、具体的な目の前にあるものから抽象的、仮説演繹的に「もし」の世界を考えられることになってきますが、その中でも実際に、たとえば、国語などの授業で、説明をする、討論をする。後でお話があるメディアリテラシーで、こうした力は育成できると思います。省察的思考力については、特に自分自身をコントロールする力が段々ついてきます。また、自分以外の視点をとれるようになってくる。他の人の気持ちがわかるようになってくるのは、この時期だと思います。

そういう中で、自分の課題を見つけて、学んで、そして、その中で、学び方とか考え方、そうしたことを身につけていくというのが、小学校時代の大きな課題だと思います。特に、幼稚園から小学校へ移行という時に、これは、海外の動向の調査を東京大学の秋田喜代美先生がまとめたものですが、コミュニケーション能力とかストレスにうまく対処する力とか、批判的思考力、自立性とかそういうのが幼稚園から小学校に移っていく時に大事であると、ドイツにおいては重視されています。つまり従来は、言葉などの認知的能力の重要性がいわれていたわけですが、社会的な能力として、レジリエンス（可塑性、柔軟性）と、コミュニケーション能力と並んで、批判的に考える力の重要性が指摘されています。

ここで、批判的思考を育成する小中学校の事例として千葉県「豊かな人間関係作り実践プログラム」を紹介します。これは、小学校1年生のコミュニケーションから始まって、感情、問題解決、クリティカルシンキング、セルフコントロール、意思決定までの9年間のプログラムを作っています。

小学校1年生のこのプログラムを見てみると、まず、「仲間と仲良く助け合う」という単元目標で、目当てとして「聞き上手になろう」があって、そのために、①返事をする。②していることをやめる。③相手に身体を向ける行動を身につける。ことが目標になっています。つまり傾聴。うまく聞くということ

重視して1年生では教えています。

2年生では、「仲間・友だちと仲良く助け合う」という単元目標で、目当てとして1年生と同じ「聞き上手になろう」があって、特にここでは、①返事をする。②していることを止める。③相手に身体を向ける。これは1年生にやったことです。次は④頷く。⑤最後まで聞く。⑥相槌を打つ。⑦質問をする。ここまですべてを課題にしています。質問をするということは、批判的思考の重要なステップです。

6年生になると、「上手な自己主張をしよう」という単元目標において、①自分の主張の結論をいう。②結論の理由を言う。③相手にも意見も聞く。そして、④相手の主張も受け止めた相槌を打つということで、相手の主張もきちんと聞く。あるいは自己主張の言葉を知る。こうした中でうまく自己主張の仕方を教えています。

中学1年生になると、「クリティカルシンキングができるようになろう」という単元目標において、「出来事を事実と思い込みに分けよう」とか「自分の考えることを冷静に話せるようになろう」という目標で、自分の確かめたいことに最後に疑問形を言う、相手に発言のチャンスを与えるなどの身につけるスキルを設定しています。

このプログラムは、総合的な学習の時間の中で実施されています。後でお話があるメディアリテラシー（メディアを読み解く力）も、小学校からの育成が大事で、批判的思考が支えています。主体的にどうメディアを読み解いていくのかは、私たちに非常に大事な問題です。お話には作者がいることを知ろうとかコマーシャルの秘密を考えようなど、このような授業も総合的な学習の時間で行っている学校があります。

まとめ：批判的思考力を身につけるために

最後に、皆さんに伝えたかったことは、次の5つにまとめます。

1番目は、批判的思考のスキルを身につけるということで、明確化とか隠れた前提を探すと根拠の確かさを検討することです。

2番目は、批判的思考の態度を身につけることです。特に探究心が大事であるというお話をしました。マイサイド・バイヤス（自分中心の見方）にとらわれずに、多角的な視点で異なる価値観を理解することが大事だということです。

3番目は、いつも批判しているのではなくて、批判的になるべき大事な時に批判的になるということの大切さです。

4番目は、特に学生の皆さんには、質の高い、いい経験をたくさん積んで欲しいということです。そしていい情報をたくさん得て欲しいです。高いレベルの挑戦をするような機会をたくさん作っていくことが大事ですし、あるいは、学ぶモデル、いい先輩を見つけるというのがいいかもしれません。

それから最後の5番目、これは、自分の思考過程と経験を省察する習慣やツールを身につけるということです。1日15分、1日を振り返って、うまくいかない点をまずは振り返ってみる。そして、うまくいかない点を振り返ったら、明日以降何をするのかを考えてみるということです。うまくいかない点ばかりを振り返っているとだんだんと落ち込んでいきますから、最初の5分ぐらいはそれに時間を使ってもいい

ですが、次の10分は、次に何ができるようになるか。何をするかを考える、自分の成長を考える。そして、自分が今やっていることを長期的な目標の中に位置づけることが大事だと思います。一見、退屈な学校の学習もすべて自分の将来のための位置づけができれば、それは、大きな意味があるのではないかと。皆さんが人生において、何をやりたいのかそれが一番大事なことだと思いますが、それに結びつけるということです。そして、進歩とか熟達とか目標達成の記憶です。皆さん何かに関して熟達していく。少しずつ前進していく、進歩していくそういうものがあるというのが非常に大事なことでないかと思っています。それから、もう一つは、学び方を知る。自分の個性とか持ち味に気づくことです。多分、世の中には、いろいろな勉強法や学習法の本がありますが、一番いい方法を知っているのは自分自身ではないかと私は思っています。そういう意味では、自分自身をうまく振り返って、自分が最もよく勉強できる方法を見つけて、それを改善していくのが一番ではないかと思っています。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

一色：楠見先生、ありがとうございました。特に今日の楠見先生のお話は、質の高い経験の一つとして、我々一人ひとりがその経験をいかに自分の人生に活かしていけるのかを考えていただきたいと思います。それでは、今お話いただいた基調講演に対して、別の視点からコメントをいただきます。服部先生お願いいたします。

服部：こんにちは。私の仕事は、皆さんの関係でいうと、「おかあさんといっしょ」とか「大科学実験」などの番組があります。またほかにも「アールの法則」という、なんでもランキングにして、ことを面白おかしくして見てみようという番組もあります。そして今やっているのは、「スーパープレゼンテーション」という、今日のテーマとも近いのですが、プレゼンテーション能力をつけようということをしています。他には「英語でしゃべらナイト」とかをやっています。

私自身は制作ではなくて、いまは販売促進、どのように作ったら、皆さんに買ってもらえるかという仕事です。私は、つい最近まで長い間、研究というのをしていました。大学でいうと、大学のブランディング調査とか、そのほかにも、ありとあらゆる研究調査をして参りました。一色先生のご指導の下で、厳しく鍛えられました。こちらの大学は初めてですが、非常に環境がよくて、羨ましい環境の中で勉強をされていて皆さんは幸せです。

今日は楠見先生とは全く印象が違うお話をします。但し、内容は全く一緒です。リテラシーというと、楠見先生がおっしゃったのは、とても論理的で、実は私は5回も楠見先生の授業を受けていて、ようやく理解してこちらにいます。(笑)

でも、考えてみるとリテラシーというと、たとえば私の最初の大学の恋人が神戸の人でした。ですから、神戸の女性を読み解こうとして、神戸の本を読んだり、地図を見たりしました。これは、リテラシーのうちの読み解きです。具体的に、もうプロポーズされた方、されている方もいらっしゃるかもしれませんが、プロポーズも一種のリテラシーがないとできません。たとえば、皆さんがプロポーズをするとして、まず、相手の気持ちを読み解かないといけません。本当はどう思っているのだろうかという読み解きがあります。

それから、もうはっきりだからプロポーズをしようと、でもどういう理屈でどういう場面で、どう言うのか。今の連続テレビ小説で「純と愛」をしています。迫る時どういうタッチでいくか。これは情報を作る、コンテンツを作るということで、リテラシーの2つ目になります。普通の言葉でいうと作文の段階です。

3つ目はそれをどう伝えるか。たとえば、アメリカ人は必ず恋人の前に跪いて言う、というのがプロポーズのきまりです。今、渋谷などで時たまありますが、サプライズで「愛しているよ、結婚してくれ」と電光掲示板に載せるというのがあります。これは、リテラシーでいうと、発信ということになります。です。リテラシーは皆さん、実は毎日関わっています。

もう一つ、最近の私の例で言うと、メールはリテラシーがないと駄目です。この前私は、夜遅くメールをしていて、部下からメールがきました。そっけなくメールを返したので、翌日喧嘩になりました。メールというのは非常に難しいのです。その失敗を話しましょう。このメールに書いてあったことは、明日は何時からですか、ということが深夜に来たのです。ですから明日は10時からだから遅れてくるなよ、と返したら、次の日に大喧嘩になる。なぜかという、深夜にメールを送った人は何かいいたいことがあったわけです。それを私は読み解けなくて、ひどい上司ということになりました。皆さんもメールでトラブルが生じたことがありますか。これもリテラシーの問題で、リテラシーというと常に皆さんとあって、先生がおっしゃられた通り、4歳からずっと使っているわけです。いろいろお母さんの気持ちを読み解いたり、こうしたら喜ぶのではないかとか、ありとあらゆることをやっています。

さて、本題に入ります。皆さんの周りにいろいろなりテラシーがあります。話ばかりをしていてもつまらないので、クイズをします。(笑) 今、ここにあります、H大学の教育理念。この大学はどこでしょうということ。これは、教育理念というものです。実は、どこの大学にも教育理念があって、まず皆さんの大学についても、聞いてみましょう。甲南女子大学にも何を教える大学なのかというのが、3つ書いてあります。今日、ホームページで調べてみたら、書いてありました。皆さんのことだからご存知でしょう。(笑)

まず、前列の皆さんから聞いてみましょう。どうぞ。誰か知っている方いますか。学生さんでお願いします。どうぞ。四文字熟語です。どうですか。

学生 A: 自学創造。

服部: さすが。合っています。自分で学問を創造しましょうということ。これは殆ど、リテラシーそのものです。他あと2つありますがどうですか。

学生 A: 個性尊重。

服部: すばらしい。そこに何かあんちょこがありますね。(笑) それでも偉い。では、もう一つありますので言ってください。

学生 A：全人教育。

服部：その通りです。では、先生に正解を映してもらいましょう。こういうことになっています。

実は、基本的な精神はここにありまして、こういう人間になることと、個性豊かな人間になること、自分で学問を創造する人間にする。これは、大学が皆さんへの約束であると同時に、お父さん、お母さん方への約束でもあるわけです。

さて、ここからが本番です。H 大学という大学がありまして、これは、ある有名な大学です。皆さんにこの大学が一体どこかを当てていただきます。どの辺りの地域かというと、ばれてしまいますので…。

これをみていただくと、この大学は正面を切ってこのようなことを言っています。「大事なことを8つ教えます。一つは正確に理解する能力、正確に書く能力、正確に意思の疎通を図る能力を持たせます。後は、数量的な処理能力、統計とかアカウンティングができるようにします。一つ以上の外国語に通じる能力をつけます。英語とかフランス語などです。そして、明晰かつ批判的に思考する能力を付けます。あと自然と社会と人間の関わり方を理解し（一種のエコですね）、知識を得る方法と考え方を習得します。最後に、違った価値観や制度をもった異文化に関する深い認識を持たせます。」

さあ、この教育方針をもつ『H 大学』がどこかわかりますか。では、直感でいきましょう。北海道大学、なるほど。…大阪大学。他にいますか。（いろいろ名前が挙がる）実は違うんです。これはハーバード大学です。ハーバード大学はこれを基本として、世界の頂点にたった大学であります。

そういうことで、リテラシーというのは、とても皆さんに関係があります。実は、楠見先生はリテラシー、批判的思考態度をベースに京都大学を大きくしよう、というプロジェクトを目論んでおられます。リテラシーというのは、大学ととても密着しています。

では大学生として、「私のリテラシー」を考えていただくとすると、要するにこういうことです。皆さんは、恋人を見抜けますか。また、就職活動に行った時に、その会社の本当のことは見抜けますか。または、会社に行って、自分をプレゼンできますか。このような問題になります。非常に重要な問題です。

もう一つ、更に重要なことは、子どもを相手にしなければならないということです。皆さんは、子どもを見抜いたり、そういうことができるようにしたりしなければなりません。たとえば、子どもが4歳からできるようになることがあります。3歳ではできなくても4歳ぐらいになるとプリテンド、ふりをしたり、ごまかしたり、遊んだり、発信したり、同化したり、これはすべてリテラシーになります。そうすると、皆さんはその渦の中に入って行って、子どもたちをコントロールしなければいけない。つまり、先生として試される時がきます。簡単にいうと、自分のリテラシーがないと子どものリテラシーに負けてしまいます。こういう問題があって、実はこれがいま小学校のいじめ問題につながっています。先生が全くいじめに対するリテラシーがない。ということでリテラシーは、学生である皆さん、将来は先生になる皆さんに、非常に関係があります。

では、早速、「小学生に負けるなテスト」をやります。（笑）皆さんに配った資料の中に顔がついている写真があります。これは小学生の読み解きのための実際のテスト用紙です。これは、皆さんが普通にするとできてしまうので、今から30秒でやっていただきます。では、記入してください。答えは5

つ書くところがあります。

はい、以上です。ペンを置いてください。で、何問解けたでしょうか。では、2番目の列の学生さんから答えてください。「ニュースで下のような映像が流されました。あなたは、この映像を見てどのようなことが言えると思うか、当てはまるものを一つ選んで()に○をつけてください」。これは、小学校3年生のテストです。これは外国のテストの引用なので、左側が女の子っぽい人、男っぽい人、アーティストのような人がいます。

では、答えてください。

学生 B：コンサートのお客さんに男の人と女の人のどちらが多いのかはわからない。

服部：正解です。これはそうですね。全員大丈夫でしたか。では次にいきましょう。これは引っかけがあって面倒ですのでよく気を付けないといけません。

「下のある文章は、事実か、意見か、推測か」ということです。では、次の人答えてください。

学生 C：事実。

服部：そうです。おとずれましたということになっていますので、事実です。それから2つはどうでしょうか。

学生 C：推測。

服部：そうですね、本当かどうか分からないので推測です。これは前提を疑わないといけません。3つ目はどうでしょうか。

学生 C：意見です。

服部：そうです。必ずしも、きれいだったかどうかは人によって違います。では、最後はどうでしょうか。

学生 C：事実です。

服部：これは事実かどうか一見悩むのですが、他のものと考えたら事実です。これは小学生にとっては厳しいものです。こういうテストを小学生はやっている。まもなく小学校全土にこの多面的読解力テストというのが本格的に導入されます。

では、資料の次のページをみてください。これは、実は、小学生用にしたのですが、私が楠見先生にお願いして、楠見先生が作られた大学生用の質問表を小学生用に変えたものです。これは、このよ

うな16の設問があって、これに答えて、子どもたちが自分たちをどう評価しているか。それを指導に使うものです。これはまた後でやってみてください。意外に難しいものです。先ほど多面的読解というのがありました。なぜ、あのようなものをしなければならないのか。たとえば、これは事実ですが、例題、これは何ですかと小学生に何でもいいから答えてみてくださいと。これは皆さんが手に持っているものと一緒です。これをいろいろな角度から読み解いてください、というのが多面的読解力というものです。つまり、リテラシーの少し難易度が高いものです。

さてこれは、普通だったら、何と答えるのか。どうでしょうか。

学生 D: ボールペン。

服部: そうです。三色ボールペンです。答えが書いてありますね。普通はそう答えますが、ところが、小学生の面白い答えというのが、実はこういう素材をしていて、こういうことがわかると答えた小学校5年生がいます。なるほど、ゴムとプラスチックとインクと鉄でできていて、同じ工場で作っているわけではないので、いろいろな工場があるのだということが読み取れます。もう一つの例で、これは普通の小学生でも読めてしまいます。形から見て、これは何かわざとグリップがある。ものの形には理由があるから、これは握りやすさのために探求されたのだということを、このボールペンから考えてしまうのです。

こういうことが多面的読解力、いわゆるリテラシーそのものです。これは、皆さんでいうと、恋人の何気ないふりからいろいろなことを推測することと全く一緒です。

リテラシーというのは、そこにあって、実は隠れている自分にとって本当は大事な情報、あの時に気が付いていればこんなことには…と思うような情報を引き出す力です。こういうことを多面的読解力といいます。実際にやっていくわけです。

さて実際にリクツは理屈として、本当のところはどうなのか。そんなにうまくやっている人はいないのではないの?ということがありまして。たとえば、立命館大学で、本当にできるかどうかやってみよう、言うのは易く、だと。普通、京都大学の楠見先生のケースが出るのですが…。京都大学の人ならできらると思うのですが、他の大学ではどうかということで、メディアリテラシーが高まるかどうか、立命館大学で、私が元いた職場が実験をしています。これは、授業をして、皆に似たようなことをして、本当にメディアを読み解く力がつくのかということをしました。

どうやらリテラシーがつかないということはない。少しはつく。大学でやるということは大事である。今や、そういうことがわかってきた。但し、どの位つくのかがはっきりしない。だから今、大阪大学にこの授業を売り込みに行っています。ですが、もっと成果が出てから正式の講座にしますという状況です。やはり大学でする以上は、必ず成果が出ないとはいけません。そのようなことが今実際に進んでいます。これをするによって、学生さんの将来を幸せにしようということです。

もう一つは、小学校でも実験をしています。これは、資料にも書いてありますが、実は、小学校でお茶の水大学の先生がこのような調査をしました。

同じ授業を聞いても、成績が上がる子どもと上がらない子どもがいる。その差は何なのか。なぜ同

じ授業を聞いて、同じような宿題をするのだけれども、差が出るのか。それを調査すると、好奇心が強い人は、同じ授業でも成績が上がる。好奇心が弱い人は成績に反映しない。そういう結果が出ました。

それを今、批判的思考という言葉に置き換えて、実験をしようというプロジェクトが進んでいます。まだここまでできてないですが、実際は、皆さんが先ほどした多面的読解力のテストともう一つ、裏面にあるアンケートと先生が評価したものが本当に役に立っているかどうか、それを調べているところです。

言うは易く実際にするのはたいへんで、今のところの結果、答えはまだはっきりとした関係が見出せないということです。理由ははっきりしてはいて、子どもたちのアンケートが難しすぎるということです。皆さんがやってみてもわかるのですが、大学生がやってみても結構難しいアンケートなので、これを改良して、子どもの読解力テストと調整しようということなのです。

私たちが一番注目したのは、これは皆さんにとっても大事な話です。それは、その子がどのくらい態度がいいか、リテラシーがあるのか、読解力があるのかということと、先生が日常していたものが、全く合わなかった、ということです。これは結構、衝撃的な事実でして、今教育界では注目されている研究です。つまりは先生が、そもそも子どもたちを見る力がない。というところで大問題となっている。

要するに、自分のリテラシーがないのに、子どものリテラシーを見抜くことは無理です。

そういうことがあって、今この辺りをはっきりさせて、きちんとしていこうとしています。ですから皆さんもリテラシー、今の教育の言葉でいうと批判的思考態度、新しい言葉で言うところの「新しい学力」が、これからいよいよ強く必要になっていきます。今のうちに是非、リテラシーを身近な実践、たとえばデートとか親とか就職活動などで高めていって欲しいと思っています。

私の今日のお話の最終的な結論は、リテラシーは自己認識が他者の洞察で簡単にわかるものではなさそう、少し難易度がありそうである。だからこそ、教育に関わる人は、自分について、子どもについて常に客観的把握を努めることが必要である。実は、楠見先生が講演された内容と私の内容は、まったくパラレルです。実は同じ内容のことを違う言い方をしただけなんです。このような意味で非常に重要であると思いますので、是非楠見先生の研究をアンプリッシュメントしていただいて、教育に役立てていただき、これからの人生、周りにある情報をうまく利用して、豊かになっていただけたらと思います。どうもありがとうございました。

一色：服部先生、ありがとうございました。服部先生のお話もとても面白く、実際に自分の頭でテストもしました。楠見先生、服部先生から皆さんにとって非常に重要な情報を発信していただきました。これに対して、是非、これはどうなのかというようなことを先生に尋ねてください。いかがですか。

服部：これは、一色先生の演出通りになっています。私の個人的な意見ですが、面白く言うと、一色先生は、NHKの中でクリティカルシンキングがある人です。昔は、うるさい人だということだったので（笑）、実は今NHKでは、一色先生は穏やかな人になりました。なぜか、それは世の中が急速に変わってきたからです。昔は出る杭は打たれる、でした。皆さんも何か変に言って、後で女子会なんかで叩かれるのは嫌ですね。いいこと言ったなと思って何も言っているのだと言われます。問題はそ

の時にどうするかを、本気で考える時が来たのです。自分たちが本当は出る杭は打たれたいと本音で思っているのに、子どもたちに自分の意見を言いなさいと言っても、言うわけがありません。子どもたちの方がリテラシーが高く、先生は適当に嘘をついている、と感じ取ります。これがいじめ問題の本質の一つです。そういうこともあって、だからといってどうするかは、実はこのシーンとなるのは、京都大学でも同じだそうです。私がしている提案会議もそうです。それで、どうやって議論が進むかという、たとえば誰か、一色先生のような人がいて、何かを話します。で、ほこほこにされないな、では私も言ってみようという日本のカルチャーがあります。そのカルチャーを変えるのは皆さんの選択です。こういう社会でいいのだと思えばこのままでいいし、少し変えて、少しアメリカのUCLAのような言いたいことを言って盛り上がっている雰囲気、そんな風になってもいいな、と皆が思っただけで進めていく。なにしろアメリカに行くと、何でもいいので意見を言わないと今度は逆に叩かれる。意見がないものは駄目だという感じですが。今日本は、就職して外国に行くと、向こうでビジネスマンの間に入れなくて、自分の意見が言えなくて困っています。この辺りは皆さんに考えてもらいたいです。

一色：では、楠見先生、学問的に、それから服部先生がコメントされた点も含めてお願いします。

楠見：話の中に含めたように、最初に耳を傾ける。そして次に問いを出すというのが批判的思考の最初のステップだとお話ししました。ただ、日本では、質問がしにくいことがどこでも共通していると思います。ある種の日本的批判的思考があるとしたら、その場の雰囲気を読んでその中でクリティカルになることだと思います。しかし問いを出さないと何も始まらないというところもありますので、そういう意味では、まず皆さんが変えていく。日本の風土を少しずつ変えていくことが必要だろうと思います。

一色：ありがとうございます。皆さんは、日本風土を変えていくというような責任を持って大学を卒業していただく、地域の方も、是非、そういう方面でご活躍をしていただきたい。では、学生さんからもこういうことをして変えていきたいと思いますということがあれば、話してください。

学生E：今話を伺って、雰囲気も感じとりながら発言したいと思いました。少し疑問に思ったのですが、リテラシーと発言されていましたが、リテラシーとはどのようにして身につけていくことですか。

服部：ひどい目に合うことです。(笑) ひどい目に合うと、必然的にリテラシーが身につけてきます。たとえば、私の上司が、自由に休みを取っていいと言うのです。それで取ると怒られたのです。実はその上司は自由に休みを取ってもいいが取ってはいけないと言っていたのです。(笑) というようなひどい目に合うと、そうか、事前にきちんと調べておこうとなるのです。たとえば家で妻に休みの日に、「今日映画でも行こう」と言うと「疲れているのだからいいわよ」と言う。そうなのかいのかと休んで、そして次の日になると、「なぜ行かなかったのだ」と言われる。(笑) そういうことがある。これは、そういったのは、そういう配慮もしてあげるけれども、それでも行こうよというのはあなたから言いなさいという

メッセージだったのです。というわけで、修羅場を乗り越えると(笑)身につくと思います。

楠見：服部先生がおっしゃった通り、経験から学ぶことは大事だと思います。あとは、大学の授業もそうですが、知識、スキル、態度を身につけるということです。その中には、内容的知識と実践に役立つスキルがあります。それはメディアリテラシー、経済リテラシーなどそれぞれの分野毎の知識を身につける。そして実践の中でうまく使えるようなスキルを身につける。そして態度も身につける。この3つが必要で、そしてそれは単なる教科書的なものではなくて、やはり経験の中から身につけることが大事なのではないかと思います。

一色：ありがとうございます。では、時間となりましたので、第一部はこれで終了いたします。

【休憩】

一色：第二部を始めたいと思います。コメント、ご質問をいただきながら、先ほどのお話を広げていきたいと思います。逆に服部先生からお話があるということですので、お願いいたします。

服部：実は、「批判的思考態度」、聞きなれない言葉ですし、一瞬、日本の文化に合わないような感じがします。でもよく考えてみると、当たり前で大事なことです。実は、これは文部科学省では、最大の喫緊の課題になっています。いじめ問題の根幹にもこのようなものがあると言われていたのですが、どうでしょうか。

私の今日の一つの楽しみは、皆さんがこのような問題をどういうふうに使われているのか。簡単にいうと、遠いな、難しいなと考えているのか、あるいは日本人には、向くのか向かないのか。日本の企業の経営で向くのか向かないのか。皆さんそれぞれお感じになられたことを、是非伺いたいと思います。たとえば、本当にそうなのかと、机上の空論ではないかということでもいいので、本音のところをよろしくお願いいたします。

一色：では、今、服部先生がお話されたことも含めて、ご質問などもありましたら、よろしく願いいたします。

一般 A：私は高校の英語の教師を二十数年やっておりました。日本語で教えていて全く矛盾を感じておりました。本当は生の英語で話してあげないと英語はうまくならない。だから、今出てきた、クリティカルシンキングを教えようとしたら、やはり教える側が常に学習者に対してクリティカルな姿勢をとることを要求しないといけない。だから講義で教えても学習者の方はクリティカルにならないと思います。これは日本の文化の中にある姿勢ですから、授業だけではどうにもならない。学校や大学のシステムそのものから改編していかないといけないと思います。本当にそういうと身も蓋もありませんが、地盤を広

げていかないとだめだと思います。

服部：たいへんすばらしいご指摘だと思います。たとえばこんな例があります。昔、大韓航空で事故が多かったため、調査をしました。そして、いろいろ調べると、実は、危機的な状況なのに危機的であることを指摘する発言ができないということがわかりました。事例で言うと「機長、そのボタン間違っています」と言うべきなのだけれども、韓国の場合、機長に対してつまり目上の人に対して何かを言うのがとても失礼ということで、言えないのです。結局、航空会社がとった方法は、パイロットは英語で話をする、ということです。言葉がフラットだと、仕事の上でもフラットになり、言いにくいことが言いやすくなる。そうやって、どんな安全システムを導入するよりも、あつという間に事故が無くなったと言うのです。

そういうことをもう少し大きく考えると、今秋田に国際教養大学があって、大学のベースを英語にしています。ある会社で英語を公用語にしているところがあります。所謂、日本がグローバル化せざるを得なくなった時に、もしかすると、そのようなチャンスがあるのではないかと思っています。日本語でクリティカルにするのはどうしたらいいのかについては、楠見先生のお話を伺いたと思います。

楠見：まず、先ほどご指摘があったように、日本自体が、批判的思考が奨励されるような社会ではないのは事実です。ですから、学校、幼稚園、保育園の職員室でもそうですし、社会全体においても、目上の人に向かって意見を言う、質問をすることさえ何となく相手からネガティブと捉えられるという状況は、日本の中でどこでもあるのではないかと思っています。それを変えていくためには、日本が批判的思考の許容される、あるいは、奨励されるような社会になっていかなければならないというのは、一つの考え方だと思います。生徒たちに教えるためには、自分自身がクリティカルな人間になり、また、学校自体もクリティカルな思考や発言が奨励されるような社会になっていくべきだというのは、望ましい形だと思います。ただ、現実を変えていくのはかなり難しく、私自身は、所謂、英語のクリティカルシンキングを日本に直輸入することが果たしていいことなのかどうなのかをもう一度問い直してみることがいいのではないかと考えています。ロジカルに証拠に基づいて、相手の意見を批判したとしても、たとえば日本の職員会議でも教授会でもそういう意見が通るかという点必ずしもそうではないと私は考えています。つまり、ロジカルで証拠に基づいた主張よりも、多くの人たちが持っている調和を大事にするとか感情とか、そういうものを大事にするような、日本の文化、組織風土が非常に強くあって、それをうまく配慮しながら、うまく社会を動かしていかなければならない、組織を動かしていかなければならないかと思っています。ですから、実際にこれから社会に出ていく学生さんたちもそういうことを知って欲しいと思います。組織文化、組織風土に十分配慮しながら、その中で自分の意見を正しく主張し、また、相手の中に受け入れてもらって、組織をうまく変えていくことも学んでいく必要があります。難しいところは、日本的批判的思考が必要だと私は主張していますがけれども、たとえば他国の人とわたりあうときにどうするのか。グローバルスタンダードがあるとすると、アメリカ型でなければならぬのかはもう一つ大事な問題だと思っています。ただその中で、アメリカ型に合わせるべきなのか。あるいはもう少し

日本のような組織の調和とか全体の調和も配慮した形での、たとえば合意点、妥協点を探るような問題解決の方法もあるのかどうかは、私たちアジアの人間として今後考えていかなければならないと思っています。

服部：クリティカルシンキングを職場でしてしまったら、部下は来なくなってしまいます。現実はその通りです。ただ、もし、うまく皆が納得して、ここだけは、特区型みたいにするのはどうかと思っています。私の職場では、そうではない無礼講というのがありましたが、そういう意味でいうと、そういう環境を整えるということを徐々にやっていく。神戸というのはとても先進的な地域で、横浜と並んで、新しい文化を吸収し、新しい日本人を作ったわけです。戦後もリードをしてきて、ここからたくさんの財界人がでて、神戸精神みたいなそういう精神地域から広めていくことをやれるのではないのかと思います。

一色：私の方から質問させていただきます。今、おっしゃっていただいた部分ですが、楠見先生が今、学生、そしてこれから、教員、保育士になる学生のリテラシーがなければ、子どもにもリテラシー能力をつける。今、日本の文化とかその辺りから話がスタートしましたが、でも文化は時代とともに変わっていきます。そうすると、小さい子どもたちにそのような新しい文化を伝えていくのが教育だろうと思います。その教育のところは古い方の先生方が教えているからうまくいかない。子どもたちをもっと中心に置いて教育を考え直してみるというのは無理なのではないでしょうか。

楠見：まさに一色先生がおっしゃっている通りだと思います。私自身は従来型の教育、すなわち、教科書の知識、テキストに書かれていることすべてを正しいこととして、子どもがそれを習得して、そのテストの時にそのまま思い出せる能力で、知識、学力を評価するのは、限界があるのではないかと思います。テキストに書かれていることに対して、たとえば、子どもが別の見方があるか、別の考え方を考える。国語でしたら読解するだけでなく、別の表現の仕方がないかとか、別の考え方がないかを考えることです。つまり、テキストを絶対するという読み方から、さまざまな読み方を探っていくという指導法も必要だと思いますし、社会科でも理科でもテキストに書かれている範囲内のことを習得するのではなく、それに基づいて、もっとさまざまな考え方を広げていくことが大切です。調べ学習も行われていますけれども、それを広げていくという形で多様な考え方や見方が大切だと思います。今の学校は一つの答えのある問題ばかりを追いかけている。それを授業で取り上げて、皆が正確に解くことが大事にされています。多分これからの時代は、答えが一つでないような問題を授業でももっと積極的に取り上げるべきではないかと思います。これからのエネルギー問題をどうするのかというテーマの答えは一つではない。多分授業では取り上げにくいかもしれませんが、むしろ、これから未来を生きる子どもたちが直面しなければならない問題ですから、そうした答えが一つでないような問題も積極的に取り上げるべきだと思います。また、同じように家庭でもこのような話題について、正しい情報をいろいろなところから得て、それを家族の中で歪みがないように話をして、それに基づいて、子どもが自分の考えていることを言ったりするような家庭が必要だと思います。学校でもそのような議論ができる、家庭でもそのような議論

ができる、それが、批判的思考を促進する、支えるような社会になる第一歩ではないかと考えています。

服部：保育園の頃から実践するのは非常に重要だと思います。私の自宅の近くの川崎にある原保育園では、そのようなことを日常的にしています。その先生は元々どういう流れかという、戦前、お茶の水大学の保育関係の学校がありました。そこは自立自尊というか、はっきり言いましょうという保育士さんを作りだした時代があって、その流れの先生方は結構今も保育園でがんばっていらっしゃいます。その結果どういうことが起きているか。その保育園は、見た目がリッチではありません。でもそのようなことをきちんとしているので、近くのキャリアウーマンのお母さんの中で人気になっています。その保育園を卒園した子どもたちは、非常に個性豊かで学力も高いということが、まだ、見えないのですがある程度既に始まっています。とても小さい園なので、まだ社会的認知にはなっていませんが、現実には少しずつ進めていますので、やはり保育園から始めるというのが一番大事で、英語でいうとバンガードというか、堡塁いうか前線基地みたいなところでゆっくり進んでいく。

私は、今日なぜ甲南女子大学の建学の精神にこだわったかという、「全人教育」「個性尊重」「自学創造」というのは、言葉は古いですが、これは読み替えるとクリティカルシンキングです。ですから実は、そういう精神がこの大学には、クリティカルシンキングというような意味ではありませんが、その大元になる概念とかコンセプト、思いが入っているので、将来ここから始まったのかもしれないというのが起るかもしれないという思いもあり、学生さんに聞いてみました。実は既に予め組み込まれている。遺伝子として入っているような、神戸の教養の高い大学ですので、遠いようで近いかもしれないと思っています。他に指摘などございますか。

一般 B：3点ほど伺いたいのですが、まず、教育から変えていきたいと思いますということでしたが、親の認識というところで、東京大学をはじめ、いい大学に入れようという考えを持った人との学力に対する親の認識が二極化していると思います。そういう面で批判的思考というのは、やはりそれを認識できないというか必要がないとしている親がまだまだ多いと思います。戦後教育を受け、高度成長期に教育を受けてきた人は、いい大学を出ていい就職をしてというのが多いと思います。そういう中でどう教育していくのかというのを疑問に思いました。

2点目ですが、これからの教育は、一つの回答ではなくて、いろいろ正解があるということでしたが、やはり教師は答えを教えるということをやってきたので、回答が複数あるという教え方ができないのではないかと。そういう訓練を受けてきていないので、まず教員から訓練が必要ではないか。このような教育が大事であるのはわかるのですが、どのように教えていったらいいのかわからないのかなと思います。

3点目ですが、家庭での話合いというのも必要だということで、歪みのない認識を持って会話をしましょうということでしたが、やはり、メディアに関しても歪みがあった内容を発信していることを踏まえると、親が歪みのない内容で子どもに伝えるのは、まだまだ難しいかと、家庭に対しての教育があってこそ子どもに対しての教育が必要であるのではないかと思います。私自身は今回のことで、まず親を教

育しないといけない。子どもは親を見て育ちますので、どんな学校で教えても親が違うと言えば親のいうことに傾いてしまうということがありますので、まずは親なのかと思いました。

楠見：3つのご指摘ありがとうございました。まず、最初のご質問、学力の問題、たとえば大学入試で何人がいい大学に入るかということで高校教育の成果が測られる。また、それによって、中学、小学校も受験学力のようなもので教育の成果が測られるという現状に対しては、文部科学省も中央教育審議会の部会において議論になっています。そこで言われていることは、今までの受験一辺倒な、受験学力で測るような学力をもう一度見直したいということで、まずは、大学入試から変えることができないかということを議論しています。その中で問うべき学力として、コアとなるようなスキルや能力を問うような試験ができないか。その一つとして、クリティカルシンキングを中心とする論理的思考能力や多面的に考える能力を測るような試験を含めていくことができないかという考えがあります。そして、大学入試が変わっていけば、その下の小学校、中学校、高校の教育も大きく変わっていくことができるのではないかとということで、将来の教育改革に結びつけようとしています。

それから、2番目にご指摘を受けました、答えが一つではないことを学校で教えていくことは教師にもためらいがある。教えるにいくということがあります。何を变えていかなければいけないのかという、やはり一番大事なのは、先ほどいいました、大学入試が変わることによって、つまり一つの答えを出すような問いだけではない問題を出すことによって、高校以下の教育も変わっていく可能性があるのではないかとことです。もう一つは、一つの答えがないいろいろな課題例を総合的な学習の時間や、理科とか社会などで、教師が使えるような教材のデータベースをあらかじめ用意しておくことです。教材では、さまざまな答えがある場合に、それぞれの根拠とかデータなどのリソースをきちんと整えて、教師が不安なくそのようなトピックを積極的に取り上げることができるように、教材や授業例をたくさん増やしていくことが、授業を変えていく一つのきっかけになるのではないかと思います。

3番目の家庭の中で正しい情報を伝え、それに基づいて議論ができるような会話、風土を作っていくということですが、これも非常に難しいことだと思います。そのためには、私は、マスメディアが変わっていくことも大事なことだと思います。今のマスメディアはセンセーショナルに目立った情報を多くの人の興味を引き付けるように伝えていきます。しかし、マスメディアの方も根拠に基づく正しい情報、複数の考え方を根拠に基づいて呈示をして、それに基づいて視聴者がじっくり考えるような報道をすることによって、家族が話合することができるようになってくると思います。そういう意味では、学校を出てしまった普通の市民にとっては多くの新しい情報はマスメディアから獲得していますので、じっくり考える市民を作るような報道、番組作りをして欲しいと思います。

服部：本当のことを言ってもいいですか。それは無理です。なぜかという、マスメディアはビジネスモデルとして皆が欲しいものに飛びつかせて、CMでお金を稼ぐというシステムになっているので、無理です。でもこれは、しばらくは無理ですという意味です。但し、たとえば、今いいねという、お金をクリックするとお金が入ってくるような仕組みができてきました。そうすると、ビジネスモデルが、この

放送局はこんないい放送をしたので、いいねと言って、10円出しましょう。そういうビジネスモデルになったらあっという間に変わります。つまり、NHKはある程度そういうところがあるのですが、それでもやはり難しいところがあります。

30年前、私が入局した頃から、選択肢を出して、皆で考えてもらいましょうということは、理屈ではそうなっているのです。ところが実際は、番組で選択肢を出したら減茶苦茶になって、この番組は面白くないじゃないかとクレームがきてしまいます。どちらかというと、相互作用があるのです。この前のオバマ大統領の選挙の時にファクト、事実を確認するということに皆が見るような動きになっているので、そういうふうになるかもしれない。私の考える現実的な方法としては、マスメディアに頼らずにいろいろなメディアを皆さんが見ていった方が、実は早いのではないかと思います。たとえば、甲南女子大学放送局など小さな放送局をたくさん作っていった方がいいかもしれない。そうすると、マスメディアもいろいろなことを考えるかもしれないというのが一つです。

それから、この問題を別のやり方で解決しようとする、元々メディアはほどほどのものだという扱いでテレビを見たらどうでしょうか。実は、この前、立命館大学へメディアリテラシーの実験に行ってきたのですが、その先生が面白いからテレビなど見るなという飲食店があるというのでそのお店に行ってきました。テレビなどは絶対に信用しない。ツイッターだという話になっています。実はそのツイッターも本当に正しいのかという話になると、どちらかというと、皆両極端に増えているのです。テレビに関しては、テレビが正しい。

そこで、「テレビなんか信用できない」ではなくて、テレビはほどほどで、真実が落ちている時もあるし、全く作り話の時もある。それはNHKも例外でもないし、面白おかしく作っているところでも、実は真実がたくさん入っている場合もある。つまり、落語とか芸能なども、きちんとあるという方向も考えた方がいいかというのが一つあります。後は、ご家庭で、これは嘘だよねと余裕を持って見るような視聴形態になっていくといいかと思います。

今、ツイッターとかブログがどんどん進んでいますが、最初はいいのですが、その中もいろいろな課題が出てきて、結局最後は、同じ問題になるのではないかと。読み解く力とか、自分がどこに立っているのかとか、真実で損した場合は私としてどうするのか、など。そういう考えを、本当はそこを小学校の頃に固めておけば何とかなるのではないかと思います。実は、外国の放送局は既に、この番組について全く違う意見がありますということをネット上で公開しているところがあります。こういう番組を作りましたが、全く違う意見の人たちがいます。これはアメリカのボストンの公共放送の例でして、本当にそのようなことをしています。だから「私たちはこういう立場で制作しました。そういうことでご承知おきください」というような報道は、ありなのかもしれません。

先ほどの最初の質問ですが、お母さんたちが子どもをいい大学に入れたい。これはどうしてそうなるのか。一色先生と、「子どもに良い放送プロジェクト」という、千人の子どもが生まれてから12才になるまでを追いかけている調査をしています。今、11回目です。やはり昔の親は、早く死んでいたもので、私が死んだ後この子どもを何とかしておきたい。この子が路頭に迷わなくしたいというのが教育の眼目でした。今は違います。私が生きているうちに私と同等程度の状況になるのを見届けたい。これが本

音です。私がいた地位までは、何とかしてあげたい。これが偽らざる親の本音です。自分のランクより低い位置でいいのだという人はあまりいません。では次の時代に来るのは、どういうことかという、今、少し親御さんの間にこのような傾向がでています。どんな状況になっても生きていける子ども。つまり日本がいつまでもあると思わずに、日本という国はあるかもしれないけれども、殆ど外国の企業ばかりになった時、この子どもが生きていけるようにしておこう。この子がアジアに行った時に、どんな状況でも、生き延びられるようにしよう。そういう子どもにしようという親御さんが少しずつ増えてきています。そうになると、当然、成績がいいだけでは生き残れないので、そういう本質的な子ども観の変更みたいなのが、少し重要なことになってくるかもしれない。これは、よく一色先生ともお話していることです。

他は、実はハーバード大学の話がありましたが、なぜ、ハーバードがいちいちあのようなことをするのか。当たり前ではないかということですが、ハーバードの前提がありまして、要するにこの子どもたちは、通常の答えは知っている。頭が良くて、お金持ちで、知りうるという前提があるのです。当然そういう子どもしか来ない。その中に一流の誰にも負けない事実を確認する能力。つまり、ハーバード大学が目指しているのは回答力なのです。どんな状況になっても答えができる。たとえばアメリカですと、経済の銀行に勤めていた人が次の日に鉱山会社に勤めるとか平気であります。それでも平気で暮らせるように、いくらでも優秀でCEOになっても、突然、明日からクビだということをしします。よくニュースで見るとお決まりがあって、この位のボックスに机の中のものを入れて出ていかないといけない。それは一応、分かりました、クビになる条件交渉をしましょうということで、クビになった時の解雇の条件、その時に箱があって、その箱を持っていく。そういう時でも平気で生きられる子ども、または、生きられるリーダー、これがハーバードの精神です。だから、アマゾンの奥地でNPOをやろうとしたら、やれてしまう人間を作ろうというのがハーバードです。だから、答えはなくて、答えを作る力を作っておくという考え方も一つあるかもしれない。ハーバードは、面白いけれども当たり前過ぎます。でも実はそういう意味合いがあって、ハーバードを出た人は、どんな状況下でどんなところに入っても一流のリーダーになりますという宣言をしているのです。ですから、1年の教育費が800万ぐらいになります。それだけかかるというのは、それを保障しますということなので、そういう大学が日本でもでてきてもいいかもしれません。そういう感じがします。

リテラシーの中には、解決策を考えるというのも入っています。そういうことで、そうなったらいいねという話ばかりで恐縮ですが、世間の中でそうなっているところは、実はもう既にあるということです。そこと競争をしなければいけない。私たちはそういう人たちと競争して、100年後日本としてこの地域として生き残っているでしょうか、ということが問われている状況ではないかと思えます。

一色：ありがとうございます。他の方で何かございますでしょうか。

山田：心理学科の山田です。本日はどうもありがとうございました。今お話に出ていた教育のシステムとは話が変わるかもしれませんが、少しお尋ねしたいことがあります。

最初に感想を申し上げると、本学の建学の精神について、クリティカルシンキングの思想、根本的な

概念が含まれているとおっしゃっていただいたことについて、私はこの大学の出身でその後教員をしており、非常に長くこの大学におります。最近では大学も世知辛いといいますが、すぐ分かる効果、すぐ役に立つ資格などの話を多く聞きますので、そういう長くいるところについて、いいものがあるかもしれないとおっしゃっていただいたことについてとても個人的に嬉しく思っております。

去年1年間、アメリカに在外研究で出ておまして、これも服部先生がおっしゃった酷い目に合うと多少身につくというのが実感としてわかります。ものを言わないということは、そこにいないものと同じとみなされますので、そういう意味では鍛えられるというのは本当だと感じました。中々それを今度自分が教育として関わる中でそういう場面をどのようにして作っていくかというのは難しいということも感じました。

お尋ねしたいことに繋がるのですが、今日伺ったお話で、実際自分が関わっている教育に関していうと、臨床心理学のカウンセラーの養成に関わっており、クリティカルシンキングということで、今日は大学院生にも話を聞いてもらいました。たとえばクライアントさんの理解とか治療方針を考えると、その効果をきちんと見極めていくという中に今日おっしゃっていただいたようなことは、関わってきますので、とても大事なお話をしていただけただけということでありがたく思うのですが、その中でやはり日本的な風土の中に合わないのではないかという部分に関して、こういう考え方もあると違う視点からの意見を入れる時に自分の意見が否定されたと受け取ってしまって、感情的な反応がでる場合がある。これは特に臨床の訓練をしている人に限らないと思いますが、そういう感情的な反応というところをどう考えていくかというのが、日常でも教育の場面でもクリティカルシンキングを考えていく時に自分としては課題であると思っています。その感情調整のスキルとか自分とか他人の感情に向き合う態度とかそのようなこととの関わりで何か考えておられることがあれば教えていただきたいと思っています。よろしくお願ひいたします。

補見：山田先生、ありがとうございました。従来のクリティカルシンキングというのは、論理の部分が注目されていて、感情の面は注目されていなかったというのは非常に大事な指摘であると思います。そして、ロジックだけでは、人を動かせない。あるいは感情的な反発があれば人は動かないことがあると思いますので、感情面も同時に配慮していくのはとても大事であると思います。私は、レトリックの重要性を考えています。つまり、クリティカルシンキングだけでは相手にうまく伝わらない。相手に自分の気持ちや考えをうまく伝える時には、相手の感情をうまく配慮しながら、相手に感情的にも受け入れてもらい、理解をしてもらうという伝え方が必要ではないかということです。うまく伝える方法として、レトリックという言い方をしたのは、やんわりと伝えるとかやんわりと批判するということで、関西弁はそういう意味ではすぐれていると思います。関東弁でいうと、とてもツンケンしているというか、相手を傷つけてしまうことがあるように思います。京大の教授会の雰囲気を見ていると、関東弁で質問すると、相手に対して攻撃的な雰囲気が出てしまう。でもやんわりと関西弁で聞くと、ほんわかした感じで、批難とは思われない質問ができるようなところがあります。ですから、批判的思考は、ロジカルな面も大事であるけれども、感情、パトスを重視することも大事であるということです。そして、うまく伝える技術、

コミュニケーションの技術であるレトリックが伴わないと人をうまく動かすことができないと思います。心理療法の場面では、クライアントさんの気持ちを理解した上で心に寄り添うような形でのコミュニケーションがうまくできないと、クライアントに考えを伝えサポートするのが難しいのではないかと考えます。

一色：本日は、「批判的思考力を身につける・育む」という、非常に難しいテーマなので、議論がどこまで広がるかと思いましたが、たいへん皆さん方との議論が広がっていきました。いろいろ多面的な部分があって、それをまとめるということではできないのですが、大学受験での学力というのを変えていくというところで、大学から高校、高校から中学、中学から小学校というお話も伺いました。でも人間というのは、考えてみると、赤ちゃんから段々と、いろいろなことを身につけていくのに、教育だけは上の方から下の方へ押し込んでいくのかなと、これは、幼稚園、保育園ですばらしいいろいろなことを身につけているという話も出ましたし、そうなってくると、そちらから小学校、小学校から中学校、その方に考え直した方がいいのではないかと思った次第です。今日はこれで終了いたします。